

令和2年度第2回伊賀地域高等学校活性化推進協議会

配 付 資 料

- 令和2年度伊賀地域高等学校活性化推進協議会委員名簿・・・・・・・・・・ P 1
- 【資料1】 令和2年度第1回伊賀地域高等学校活性化推進協議会
の概要・・・・・・・・ P 2
- 【資料2①】 伊賀市内公立中学校長からの聞き取り内容について・・・・ P 4
- 【資料2②】 名張市内公立中学校長からの聞き取り内容について・・・・ P 6
- 【資料3】 伊賀地域の県立高等学校（全日制）の令和3年度入学定員・・・・ P 8
- 【資料4】 学科別募集定員の割合（県立高等学校全日制）・・・・・・・・ P 9
- 【資料5】 伊賀地域の県立高等学校の特色・・・・・・・・・・・・ P 10
- 【資料6①】 伊賀地域の中学校卒業生数の推移と予測(含社会増減)・・・・ P 13
- 【資料6②】 伊賀地域の中学校卒業生数の推移と予測(含社会増減)
【北部・南部別】・・・・・・・・ P 14
- 【資料6③】 伊賀地域の中学校卒業生数の推移と予測(含社会増減)
【北部・南部別】 グラフ・・・・ P 15
- 【資料7】 これまでの協議をふまえた論点整理・・・・・・・・・・・・ P 16

令和2年度伊賀地域高等学校活性化推進協議会 委員名簿

区 分	所 属 等	氏 名	
1 学識経験者 (1名)	三重大学大学院 地域イノベーション学研究科 准教授	かとう たかや 加藤 貴也	継続
2	上野都市ガス株式会社 取締役業務部長	にし がき ひろ なお 西 垣 浩 尚	継続
3 有識者 (4名)	中外医薬生産株式会社 取締役管理本部長	おか もり ひさ よし 岡 森 久 剛	継続
4	亀井商事	なか たに ゆき お 中 谷 幸 雄	継続
5	有限会社テレマーク	さくら い かつ いち 櫻 井 勝 一	継続
6	伊賀市PTA連合会 会長 (伊賀市立大山田中学校PTA)	にし おか ひろ し 西 岡 浩 司	R2新
7	名張市PTA連合会 会長 (名張市立箕曲小学校PTA)	ふじ はら しん や 藤 原 真 也	R2新
8 PTA関係者 (5名)	伊賀地区県立学校PTA協議会 会長 (上野高等学校PTA会長)	まつ もと まさ たか 松 本 誠 太	R2新
9	伊賀市内県立学校PTA 代表 (あけぼの学園高等学校PTA会長)	て ほ えつ こ 手 穂 悦 子	R2新
10	名張市内県立学校PTA 代表 (名張青峰高等学校PTA会長)	あお やま ひろ ひさ 青 山 浩 久	R2新
11 市教委教育長 (2名)	伊賀市教育委員会 教育長	たに ぐち しゅう いち 谷 口 修 一	継続
12	名張市教育委員会 教育長	にし やま よし かず 西 山 嘉 一	R2新
13 小中学校長代表 (2名)	伊賀市小中学校長会 代表 (伊賀市立崇広中学校 校長)	ます だ ひろし 増 田 博	継続
14	名張市小中学校長会 代表 (名張市立桔梗が丘中学校 校長)	にし やま しょう ご 西 山 尚 吾	継続
15 教員代表 (2名)	小中学校教員 代表 (名張市立北中学校 教諭)	はま だ ひろ ゆき 濱 田 博 之	継続
16	高等学校教員 代表 (伊賀白鳳高等学校 教諭)	おお た まさ ゆき 太 田 昌 幸	R2新
17	名張高等学校 校長	なか やま たか ゆき 中 山 隆 之	継続
18 県立学校長代表 (3名)	伊賀白鳳高等学校 校長	とく だ よし み 徳 田 嘉 美	継続
19	名張青峰高等学校 校長	あか つか ひさ お 赤 塚 久 生	R2新

計19名

令和2年度第1回伊賀地域高等学校活性化推進協議会の概要

- 1 日時 令和2年9月14日(月)19時00分から21時15分まで
- 2 場所 三重県伊賀庁舎7階 大会議室
- 3 概要

これまでの協議会での協議や高校生の現状、国の教育改革の動きを共有し、中学校卒業生数の減少や進路状況など当地域の県立高校の取り巻く状況をふまえ、これからの高校生に育みたい力や県立高校のあり方について協議しました。今後は、地域の子どもたちの実態やニーズをさらに詳しく把握したうえで協議を進め、今年度末(令和3年3月)、協議のまとめを目指すことを確認しました。

主な意見は次のとおりです。

《これからの高校生に育みたい力について》

- コロナ禍の中で、これまでの職業観が通用しなくなるとともに、働き方が大きく変わろうとしていることを実感している。変化し続ける社会に対応し、自分で考え行動する人材が求められている。
- 最近の高卒の新入社員は、職場に馴染むのが早い。職場体験等の社会を知る活動や部活動での学びが生きているのだろう。企業や社会で良好なコミュニケーションをとるためには、自分で考えそれを表現する力が欠かせない。加えて、ICTなどの新しい技術を使いこなす力も求められる。
- 指示されたことをやるだけでなく、自ら課題を見つけて解決していこうとする力が求められている。最近の若者には、忍耐力がついてきたと思う一方で、向上心に欠ける印象を受ける。学校での学習にとどまらず、地域社会にも関心を持ってもらいたい。そのためにも地元企業が高校の教育活動にもっと参画すべきである。
- 生徒たちがいろいろなことに興味・関心を持つことができる機会を、できる限り子どもたちに与える工夫が必要だ。
- 生徒一人ひとりが、自分自身に自信を持てることや、人間性を大切にすることも必要だと思う。
- これからは、よい大学に進学しよい会社に就職すれば、その先は安泰という社会ではなくなっていくので、失敗を恐れず挑戦できる力がますます重要になる。
- コロナ禍で、学校に通えない状況の中、生徒たちは自分自身で考え行動する活動が増えた。これからはより自立した学習者であることが求められる。
- 外国の子どもたちと比較すると、プレゼンテーション能力やPRする力の向上が必要であると感じる。
- 高校には課題のある子どもたちや支援を必要とする子どもたちも共に学んでおり、教員は様々な工夫をしながら教育活動を行っている。そんな中、「自立する力」と「共生する力」が大切であると感じており、課題を解決する力や情報を活用する力、コミュニケーション力を育む教育を進めたい。
- 子どもたちが社会の変化や身近な課題を、どれだけ自分事としてとらえられるかが重要であり、そのためには課題の解決に向けて、友達と共同して取り組む経験を積むことが必要である。

《地域の県立高校がどうあるべきかについて》

- 学校にうまく馴染めない子どもたちが社会へ出て力を発揮できるよう、持っている力を伸ばし育てることが大切である。そのためにも昼間定時制の設置を検討してみるかどうか。
- ほぼ高校全入の時代にあつて、特別な支援を必要とする子どもたちや外国にルーツのある子どもたちの中には、高校に進学するために地域外の学校を選択せざるえない状況がある。地域の高校に進学したい地域の子どもたちにとって望ましい学校の選択肢を用意し、カリキュラムを工夫することが大切である。
- 伊賀白鳳高校において学科を減らさずに35人、30人学級を導入することは、少子化が進む中でも子どもたちの多様なニーズに応え、少人数のきめ細かな指導ができることとなり活性化につながる。
- 35人、30人学級の実現は、学びの多様性の確保という点で意義深い。一方で、学級数が変わらないのに教員数は減少することから、地域人材の教育活動への参画など、カリキュラムマネジメントがより大切になる。
- 伊賀白鳳高校では、コロナ禍においても、オンラインで工場見学を実施するなど地域の産業界の方々の支援のもと教育活動を継続している。地域に貢献できる人材の育成には、地域や家庭との連携・協力が不可欠である。
- 地域を誇れる子どもたちを育てるためには、「伊賀の子どもは伊賀で育てる」という考えのもと、小中学校で学んだことを高校でも引き続き学ぶなど、教育の連続性を意識することが大切である。
- コロナ禍の影響で経済的な不安がある中、地域内の高校への進学希望は切実なものがある。子どもたちの進路希望は丁寧に見ていく必要がある。
- 通学事情をふまえると現状の伊賀地域の県立高校の配置は適切であるといえる。今後の配置を検討する際も、通学の負担を考慮して考えてほしい。
- 交通事情から地域外に進学しにくい子どもたちもいる。SDGsの観点から誰一人取り残さない質の高い教育の実現に向けて、地域の子どもたちが地域の学校に進学できる環境づくりが大切である。伊賀市では、安心して地域の学校に通学できるよう、来年3月末まで伊賀鉄道の利用者への通学費の補助（3分の1にあたる額）を実現した。以降についても検討中である。
- 伊賀地域には私立高校が4校ある。地域内の県立高校と私立高校が、学校間で連携して授業を行うことで、多様な選択肢を提供できるのではないか。
- 今回の協議会では、伊賀地域においては多様性を大事にする教育が必要であるといった意見が多く出されたように思う。是非、中学校の現場の声を聞き取り、次回以降の協議の資料としてほしい。

伊賀市内公立中学校長からの聞き取り内容について

- 1 日時 令和 2 年 9 月 2 4 日 (木) 1 1 時 0 0 分から 1 1 時 2 5 分まで
- 2 場所 三重県伊賀庁舎 第 5 会議室
- 3 出席者 伊賀市内公立中学校長 9 名、県教育委員会教育政策課 2 名
- 4 概要

これまでの協議会での協議や中学校卒業生数の減少予測等について共有し、伊賀市内の公立中学校長から最近の中学生の進学状況や、地域の県立高校のあり方について聞き取りをしました。以下は、その内容です。

○＝中学校長、●＝教育政策課

《中学生の進学状況について》

- 伊賀市内といっても、市内北部の J R 関西線の沿線付近（島ヶ原、阿山、霊峰、柘植）や旧上野市の市街地（崇広、緑ヶ丘、城東）、南部の近鉄大阪線付近（上野南、青山）、鉄道のない地域（大山田）と多岐にわたり、通学事情によってそれぞれに進学の状況は違う。
- 交通の不便さや経済的な状況により、地域外への進学が難しい子どもたちの進学先を確保することが重要である。リーマンショック以降はより切実なものがある。
- 市内北部の進学先は、伊賀市内 3 校に集中している。名張市内 2 校への進学者は少なく、J R 関西線の沿線北東部付近の中学校からは、亀山高校や滋賀県の私立高校へ一定流れる。
- 鉄道のない地域は路線バスの本数が少なく、保護者等の送迎がないと名張市内の高校への通学は困難である。
- 南部の近鉄大阪線付近の中学校は、名張市内 2 校への進学者が比較的多い。

《伊賀市内の県立高校について》

- 定員割れが常態化していたかつての伊賀高校の頃とは、現在のあけぼの学園高校は全く違う。子どもたちが興味を持って学ぶカリキュラムを編成し、きめ細かい指導もあり地域からのニーズに応えている。
- 伊賀白鳳高校は、地元企業への就職が強いことが中学生や保護者の信頼につながっている。定員減とは言え、学科を減らさずに 3 5 人、3 0 人学級を導入することは大変ありがたい。
- 伊賀地域北部では、大学進学希望が増えておらず、以前に比べ普通科志向ではなくなっている。そんな中、上野高校への入学者の学力層はますます広がってきている。

《地域の県立高校のあり方について》

- 今後、令和3年3月から令和8年3月までの間で、伊賀地域の中学校卒業生数の増減について、北部では減少が進み、南部ではほぼ増減がないことが見込まれる。北部の中学校卒業生数の減に対して、伊賀地域全体で子どもたちの学びの選択肢を確保するとともに伊賀市内3校での定員減をふまえて検討する必要がある。
- 特別な支援を必要とする子どもたちや不登校傾向の子どもたち、外国にルーツのある子どもたちの学びをどうしていくか。その役割をあげぼの学園高校や定時制が果たしており、今後もニーズに応じてほしい。
- 特別な支援を必要とする子どもたちや不登校傾向の子どもたち、外国にルーツのある子どもたちの学習環境を整備するうえで、昼間定時制の設置は一つの方策であるが、設置する場所やそれに伴う通学支援などが課題である。
- 伊賀市内への進学希望者が多いことをふまえると、現在の3校を維持してほしい。あげぼの学園高校は、定員を減じてでも可能な限り維持してほしい。
- 今後の少子化の進行等の影響により、各校が定員割れを起こすような状況は望んでいない。伊賀市内の3校が活性化しにくくなるのなら、再編を検討することは致し方ない。

名張市内公立中学校長からの聞き取り内容について

- 1 日時 令和 2 年 9 月 3 0 日 (水) 1 1 時 0 0 分から 1 2 時 2 0 分まで
- 2 場所 名張高校 校長室
- 3 出席者 名張市内公立中学校長 5 名、名張市教育委員会 1 名、
名張市内県立学校長 3 名、県教育委員会教育政策課 2 名
- 4 概要

これまでの協議会での協議や中学校卒業生数の減少予測等について共有し、名張市内の公立中学校長から、多様な中学生の実情やニーズ、進学状況、地域の県立高校のあり方について聞き取りをしました。以下は、その内容です。

○＝中学校長、◎＝名張市教委、◇＝県立学校長、●＝教育政策課

《中学生の現状や進学状況について》

- 集団になじめない子どもたちや不登校傾向の子どもたちが一定いる。特別な支援を必要とする子どもたちも増えている。全日制高校に通う生徒の中には、人間関係のトラブルなどで不登校になる生徒もいる。
- 不登校傾向の子どもたちは、遠方であっても自分の特性やニーズに合った地域外の私立の通信制高校（オンライン授業での単位修得、週に 1～2 日の登校など柔軟なカリキュラムを実施）に進学する生徒が多い。保護者どうしがネットワークを通して情報を収集共有し進学先を選択している。その選択肢の中に、県立高校（例えば昼間定時制）があるとよい。
- ◇ 多様な学びのニーズに地域の県立高校が応えられていない状況があるため、域外の通信制高校などへ進学せざるをえない子どもたちが存在する。
- 奈良県立山辺高校山添分校へ多くの生徒が進学しているが、かなり小規模化しており、分校がいつまで存続されるのか先が見通せない。なくなったときの生徒の進学先が危惧される。

《地域の県立高校のあり方について》

- 保護者は子どもたちの特性やニーズに合った柔軟なカリキュラムを期待している。社会的に自立していく力を地元で育みたい。子どもたちの多様性に応じた学習支援を全日制高校でもすすめてほしい。
- 学校を再編するときは、特色ある学科・コースの維持・設置を図るとともに、特別な支援を必要とする子どもたちや外国にルーツのある子どもたちなど、多様なニーズに対応した学びの実現を合わせて考えていく必要がある。
- 伊賀市内の専門高校が再編され伊賀白鳳高校としてスタートしたとき、出願しづらくなった子どもたちもいた。再編されたことによりハードルがあがり、しかたなく域外へ進学することにつながることもある。
- 進学先を選ぶときには、3 年間学び続けられて卒業できるかどうかを考えることか

ら、多様性に応じて最後まで丁寧で面倒見のよい学校が求められる。

- ◎ 名張市内で育った子どもたちが地元の学校に進学できることが望ましい。子どもたちの特性に合った学びの選択肢が管内に必要である。
- 多様なニーズに応えるための学びの確保をどうするかをしっかりと考えることがまず大切である。そのうえで10年先を見据えた学校のあり方、配置を検討すべきではないか。
- 北部と南部と立場でたとえ考え方が違ったとしても、伊賀全体を見て議論を進めなければならない。
- 地域の中学生の学習ニーズに応えるために、県立5校の今後のあり方がどうあるべきかをしっかりと考え、多様性への対応についても考えていく。

《昼間定時制高校について》

- 不本意ながら地域外の通信制高校や昼間定時制高校へ進学しなくてもよいよう、地域内に昼間定時制高校があるとよい。
- 県立高校において、私立の通信制を併設した昼間定時制のように、子どもたちの特性に応じた学習支援ができるよう、カリキュラムを工夫し充実させれば、より生徒一人ひとりのニーズに応じた学びを整備できるのではないか。その際はオンライン授業などの最新のツールを取り入れてほしい。
- もし昼間定時制の設置を考えるのであれば、定時制の再編・統合も含めてセットで検討することになるだろう。昼間定時制を設置することで、仮に名張高校定時制がなくなるとするとどうか。
- 単に名張高校定時制がなくなってしまうのは困る。その際は地域の高校でその役割を担えるようにしてほしい。

《伊賀地域の県立高校について》

- 名張高校定時制は、きめ細やかで丁寧な指導のもとよくやってくれている。
- 今年度の中3生は、名張青峰高校への希望者が多い。
- 以前は、何が何でも上野高校へという子どもたちが多数であったが、最近は名張青峰高校で将来の希望先を目指すという子どもも増えてきた。名張青峰高校にとってはチャンスである。1期生の結果はPRになっている。市外の高校へ進学しなくても夢を実現できる学校になってほしい。
- 伊賀全体の県立高校の活性化をふまえると、リーディングスクールとしての上野高校の活性化が大切である。

伊賀地域の県立高等学校(全日制)の令和3年度入学定員

上野(普通・理数科)

普通(6)	7学級 (280人)
理数(1)	

名張青峰(普通科)

普通(5)	6学級 (240人)
文理探究コース(1)	

伊賀白鳳(専門学科)

機械	機械工学	7学級 (240人)
電子機械	ロボット 電気工学	
建築デザイン	建築・インテリア デザイン	
生物資源	バイオサイエンス 生産ビジネス	7学科 13コース
フードシステム	フードサイエンス パティシエ	
経営	ビジネス マネジメント	
ヒューマン サービス	介護福祉 生活福祉	

名張(総合学科)

総合	文理アドバンス	5学級 (200人)
	総合ビジネス	
	健康スポーツ	4系列
	表現デザイン	

あけぼの学園(総合学科)

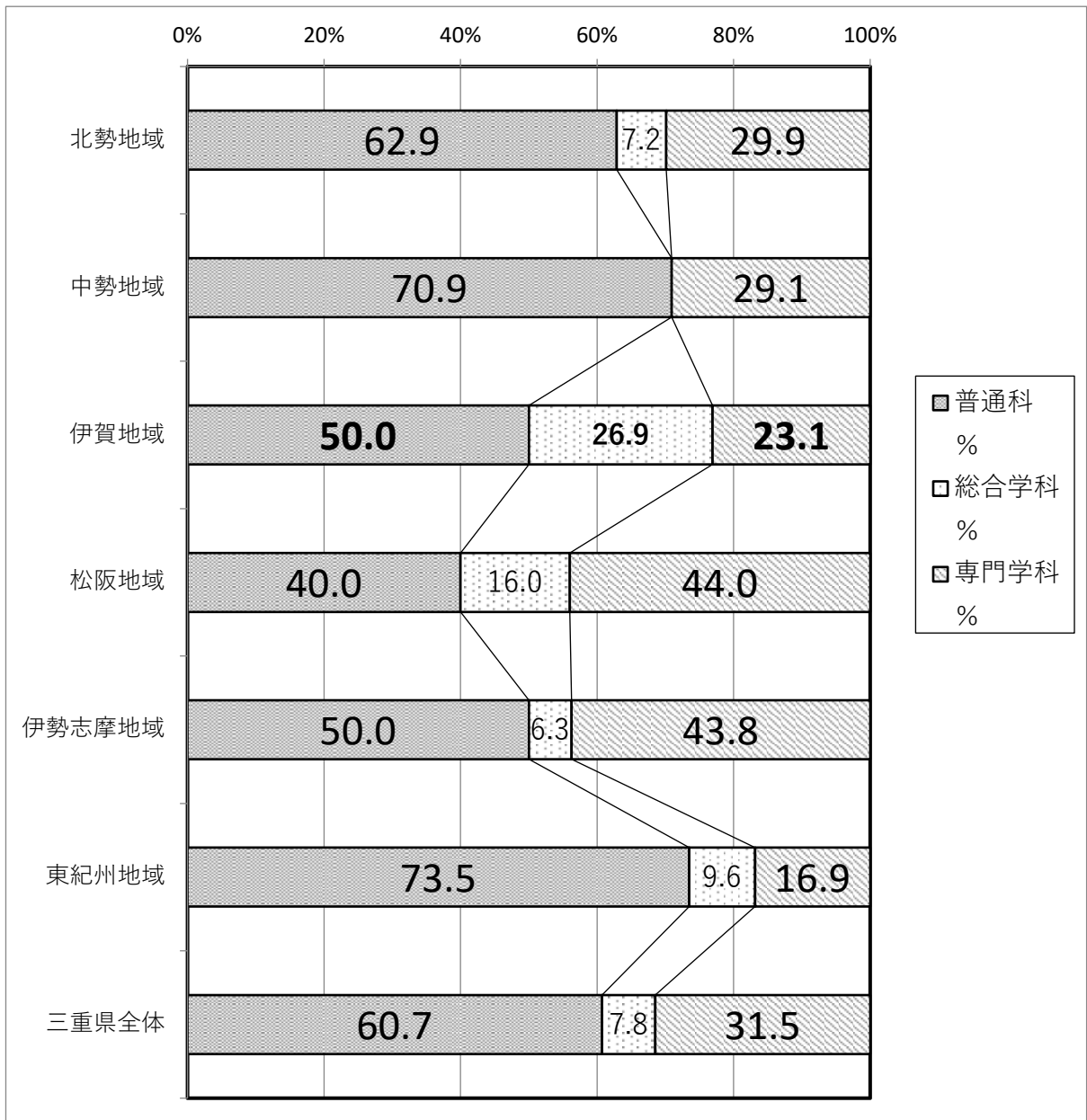
総合	製菓調理	2学級 (80人)
	美容服飾	
	情報教養	4系列
	健康福祉	

R3年度
1学年
計27学級
(1,040人)

令和8年度頃
1学年 計24~25学級(920~960人)程度(見込)

	普通科 %	総合学科 %	専門学科 %
北勢地域	62.9	7.2	29.9
中勢地域	70.9	0.0	29.1
伊賀地域	50.0	26.9	23.1
松阪地域	40.0	16.0	44.0
伊勢志摩地域	50.0	6.3	43.8
東紀州地域	73.5	9.6	16.9
三重県全体	60.7	7.8	31.5

※ 令和3年度の県立高等学校募集定員(全日制)



伊賀地域の県立高等学校の特色

《上野高等学校全日制》普通科6学級、理数科1学級

- 120余年の歴史と伝統があり、多くの卒業生が各方面で活躍しています。地域からは、生徒の進路希望をきめ細かくサポートしてくれる進学校として信頼を得ています。
- 学業と部活動の両立をモットーに、9割を超える生徒が部活動に加入しており、東海大会や全国大会の場で活躍している部もあります。
- 2019年度からは文部科学省よりスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受けて、理数科・普通科共に探究教育活動に取り組み、学習活動の更なる充実を図っています。その中で生徒は自ら課題を発見しそれを克服・解決します。
- また、65分授業を採用し、毎日の授業を充実させて学習指導の更なる充実を図っています。生徒は授業後や放課後も積極的に教員に質問したり、教室や自習室、廊下の自習机などを活用したりして意欲的に学習に取り組んでいます。
- さらに、放課後や長期休業等に課外授業を充実させるなど学校をあげて一人ひとりの進路希望の実現をサポートします。

《あけぼの学園高等学校》総合学科2学級(4系列)

- 各年次80名という小規模な学校で、各年次を3クラスに分けてホームルームを構成しています。
- 習熟度別学習や少人数教育を積極的に取り入れ、学ぶ喜びを感じられる授業を展開し、家庭的な雰囲気の中で一人ひとりを大切にする教育を推進しています。
- 「美容服飾」「製菓調理」「健康福祉」「情報教養」の4つの系列を持つ総合学科で、多くの選択科目から一人ひとりの個性に応じた授業を選択することにより将来の夢の実現をバックアップします。
- フィールドワークやインターンシップ、小中学校との交流やイベントへの参加などの地域と連携した取組を積極的に取り入れ、自信と誇りを持ち、地域に貢献できる人材の育成を図ります。

《伊賀白鳳高等学校》工業科3学級、農業科2学級、商業科1学級、福祉科1学級

- 工業、農業、商業、福祉の学科を有する三重県唯一の総合専門高校です。地域に根ざし、地元で活躍できる生徒の育成をめざします。
- 7つの学科（機械科、電子機械科、建築デザイン科、生物資源科、フードシステム科、経営科、ヒューマンサービス科）を設置しています。入学後に、13のコース（機械工学、ロボット、電気工学、建築・インテリア、デザイン、バイオサイエンス、生産ビジネス、フードサイエンス、パティシエ、ビジネス、マネジメント、介護福祉、生活福祉）に分かれて、職業に関する専門的な学習を行います。
- 3年間を通した系統的なキャリア教育を推進し、生徒の興味・関心や適性に応じた進路が実現できるよう積極的に支援します。
- 企業と連携した伊賀版デュアルシステムを導入することにより、実践的かつ高度な専門教育を推進します。

- 部活動を奨励し、文化・スポーツ活動を通して心身を鍛えることにより、心豊かな人間性と個性を伸ばすことに努めます。
- 2年次からは、進学希望者に対応するため、専門科目に替えて普通教科・科目も選択することができます。
- 各種検定や職業資格の取得ができるよう補習授業等にも積極的に取り組みます。

《名張高等学校》総合学科5学級(4系列)

- 本校は、校訓である「自律」「協調」「創造」の精神を活かし、地域とともに新時代の社会に貢献できる人材を輩出する学校を目指しています。Society5.0の新しい社会に必要な資質能力の育成を目指して、地域との連携を更に進め、仲間とともに目的に向かって協働する態度を身に付けていきます。
- 現行の総合学科6系列を令和3年度入学生から4系列にカリキュラムを変更し、今まで以上に地域の方々から授業の支援を受けるなど、より地域に開かれた学校となります。
- 文理アドバンス系列では、文系教科または理系教科を中心に広い視野で仲間とともに学習し、大学短期大学・看護医療系専門学校へ進学できる力を身に付けます。
- 総合ビジネス系列では、ビジネスの基礎を学習することで、将来即戦力として地域や企業で活躍できる力を身に付けます。
- 健康スポーツ系列では、健康・スポーツの専門的な学習をすることで、健康を維持し、スポーツに積極的に関わる姿勢を身に付けます。
- 表現デザイン系列では、絵画・演奏研究・ファッション、映像などの専門的な学習を通して、創造力や自己表現力を身に付けます。
- 1年次「産業社会と人間」、2・3年次「総合的な探究の時間」を通じて、生徒の主体的な進路実現ができるようきめ細かな指導を行います。生徒の進路先は、進学60%、就職40%であり、総合学科の特色ある学びのシステムにより、幅広い進路実現を可能にしています。
- 「吹奏楽」「美術」「放送」「新聞」「茶華道」などの文化部をはじめ、運動部についても充実した施設設備を活用して「柔道」「新体操」「野球」「サッカー」「テニス」など人間性と競技力の向上を目指して、日々活動に励んでいます。

《名張青峰高等学校》普通科5学級、普通科・文理探究コース1学級

- 名張青峰高等学校は、いずれも単位制の仕組みによる「普通科」と「普通科・文理探究コース」を設置し、生徒一人ひとりの自己実現と進路実現を図ります。
- 「普通科」は、多様な選択科目を開講し、幅広い生徒の興味・関心・進路に対応します。
- 「普通科・文理探究コース」は、探究的活動を重視した授業や放課後・休業中のセミナー、土日の自習室開放等により、国公立大学等への進学を目指します。
- 名張青峰高等学校では、1人1台タブレットPCをはじめとする充実したICT環境を活用した授業、海外の姉妹校や留学生との交流等のグローバル教育、人権尊重をベースとした協働的・主体的学習態度の育成などにより、「未来を拓く力」、「グローバル化社会で活躍する力」、「人とつながる力」を育成します。

《上野高等学校定時制》普通科1学級

- 本校は、働きながら学べる夜間定時制として歴史が古く、多くの卒業生が社会で活躍しています。
- SHR が 17 時 25 分から始まり、授業時間は 17 時 30 分から 21 時までで、1 日 4 限授業です。2 限終了後に給食があり、パン、米飯、麺類などを組み合わせた献立です。
- 学科は普通科で、3 年と 4 年では選択科目があり、いろいろなニーズに対応しています。
- 少人数で一人ひとりに合ったきめ細かな指導を行っています。また「心のふれあい」も大切にしています。
- 生徒の国籍も様々で、年齢も幅広く、いろいろな人たちが一緒に学んでいます。また、生徒が昼間働くことを支援し、ハローワークと連携を取りながら就職したい生徒への支援を積極的に行っています。
- 「働きながら学べる学校」として、授業規律（授業ルール）を大切にし、学び直しや着実な基礎学力が身に付く学習環境をめざしています。

《名張高等学校定時制》普通科1学級

- 夕方から夜にかけて学習する高等学校で、4 年間かけて卒業します。また、通信制との連携併修や資格取得などにより 3 年間で卒業することもできます。国語、社会、数学、理科、保健体育、英語など中学で学んだ内容をさらに深く学習する科目や、中国語、食の文化、社会事情などの選択科目があります。先生が複数で指導するティーム・ティーチングや少人数指導を実施しているので、学習に不安のある人でも安心して学ぶことができます。
- 遠足、修学旅行、ボウリング大会、交通安全教室など学校行事があります。遠足は、春と秋の 2 回あり、USJ、海遊館、吉本新喜劇などを訪れ、友だちと親交を深めます。また、総合的な探究の時間に、陶芸、組みひも、彫金、ガラス工芸などを制作して文化に親しむ活動も行っています。作品は秋に開催される生徒文化作品展に出品します。三重県定時制通信制交流スポーツ大会（ソフトバレー）では、秋から練習に励み、昨年度は念願の優勝をすることができました。アグリボランティア(園芸)、人権サークルなどの生徒活動もあります。
- 授業は 1 日 4 限です。2 限目と 3 限目の間(19:05~19:25)にはみんなで給食を食べます。給食室で先生や友だちとおしゃべりをしながら食べる給食の時間は、「ほっ」とする、定時制の大事な時間です。

※ 学科・コース名、系列名および学級数は、令和 3 年度入学生のものです。

伊賀地域の中学校卒業生数の推移と予測(含社会増減)

資料6①

令和2年5月1日 教育政策課調べ

中学校卒業年月	H 29.3 卒業	H 30.3 卒業	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 現中3	R 4.3 現中2	R 5.3 現中1	R 6.3 現小6	R 7.3 現小5	R 8.3 現小4	R 9.3 現小3	R 10.3 現小2	R 11.3 現小1
伊賀市	841	829	829	807	768	788	738	740	689	685	701	665	642
卒業生数													
前年度対比		-12	0	-22	-39	20	-50	2	-51	-4	16	-36	-23
R2.3対比					-39	-19	-69	-67	-118	-122	-106	-142	-165
①公立小中在籍者数	(761)	(748)	(743)	(735)	723	736	712	751	697	697	713	676	652
②私立小中在籍者数	(80)	(81)	(86)	(72)	40	26	16						
卒業生数	689	720	674	642	657	648	636	645	673	642	648	638	615
前年度対比		31	-46	-32	15	-9	-12	9	28	-31	6	-10	-23
R2.3対比					15	6	-6	3	31	0	6	-4	-27
③公立小中在籍者数					655	649	637	674	700	668	680	666	641
卒業生数	1,530	1,549	1,503	1,449	1,425	1,436	1,374	1,385	1,362	1,327	1,349	1,303	1,257
前年度対比		19	-46	-54	-24	11	-62	11	-23	-35	22	-46	-46
R2.3対比					-24	-13	-75	-64	-87	-122	-100	-146	-192
①②③小中在籍者数					1,418	1,411	1,365	1,425	1,397	1,365	1,393	1,342	1,293

伊賀地域県立高校の1学年学級数	29	29	28	27	27								
() 内は入学定員の計	(1,160)	(1,160)	(1,120)	(1,080)	(1,040)								

(参考)

県内合計	H 29.3 卒業	H 30.3 卒業	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 現中3	R 4.3 現中2	R 5.3 現中1	R 6.3 現小6	R 7.3 現小5	R 8.3 現小4	R 9.3 現小3	R 10.3 現小2	R 11.3 現小1
卒業生数	17,513	17,458	16,811	16,489	15,781	16,211	16,020	15,890	15,582	15,434	15,254	14,729	14,363
前年度対比		-55	-647	-322	-708	430	-191	-130	-308	-148	-180	-525	-366
R2.3対比					-708	-278	-469	-599	-907	-1,055	-1,235	-1,760	-2,126
小中在籍者数					15,774	16,172	16,006	16,024	15,720	15,569	15,409	14,878	14,479

伊賀地域の中学校卒業生数の推移と予測(含社会増減)【北部・南部別】

資料6②

令和2年5月1日 教育政策課調べ

中学校卒業年月	H 29.3 卒業	H 30.3 卒業	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 現中3	R 4.3 現中2	R 5.3 現中1	R 6.3 現小6	R 7.3 現小5	R 8.3 現小4	R 9.3 現小3	R 10.3 現小2	R 11.3 現小1
伊賀北部													
卒業生数	758	749	761	747	706	727	679	684	611	626	638	605	588
前年度対比		-9	12	-14	-41	21	-48	5	-73	15	12	-33	-17
R2.3対比					-41	-20	-68	-63	-136	-121	-109	-142	-159
①公立小中在籍者数	(678)	(668)	(675)	(675)	661	675	652	693	616	635	648	614	594
②私立小中在籍者数	(80)	(81)	(86)	(72)	40	26	16						
伊賀南部													
卒業生数	772	800	742	702	719	709	696	701	751	701	710	698	669
前年度対比		28	-58	-40	17	-10	-13	5	50	-50	9	-12	-29
R2.3対比					17	7	-6	-1	49	-1	8	-4	-33
③公立小中在籍者数					717	710	697	732	781	730	745	728	699
伊賀地域計													
卒業生数	1,530	1,549	1,503	1,449	1,425	1,436	1,375	1,385	1,362	1,327	1,348	1,303	1,257
前年度対比		19	-46	-54	-24	11	-61	10	-23	-35	21	-45	-46
R2.3対比					-24	-13	-74	-64	-87	-122	-101	-146	-192
①②③小中在籍者数					1,418	1,411	1,365	1,425	1,397	1,365	1,393	1,342	1,293

伊賀地域県立高校の1学年学級数	29	29	28	27	27								
() 内は入学定員の計	(1,160)	(1,160)	(1,120)	(1,080)	(1,040)								

※ 伊賀北部＝伊賀市から旧青山町を除く。

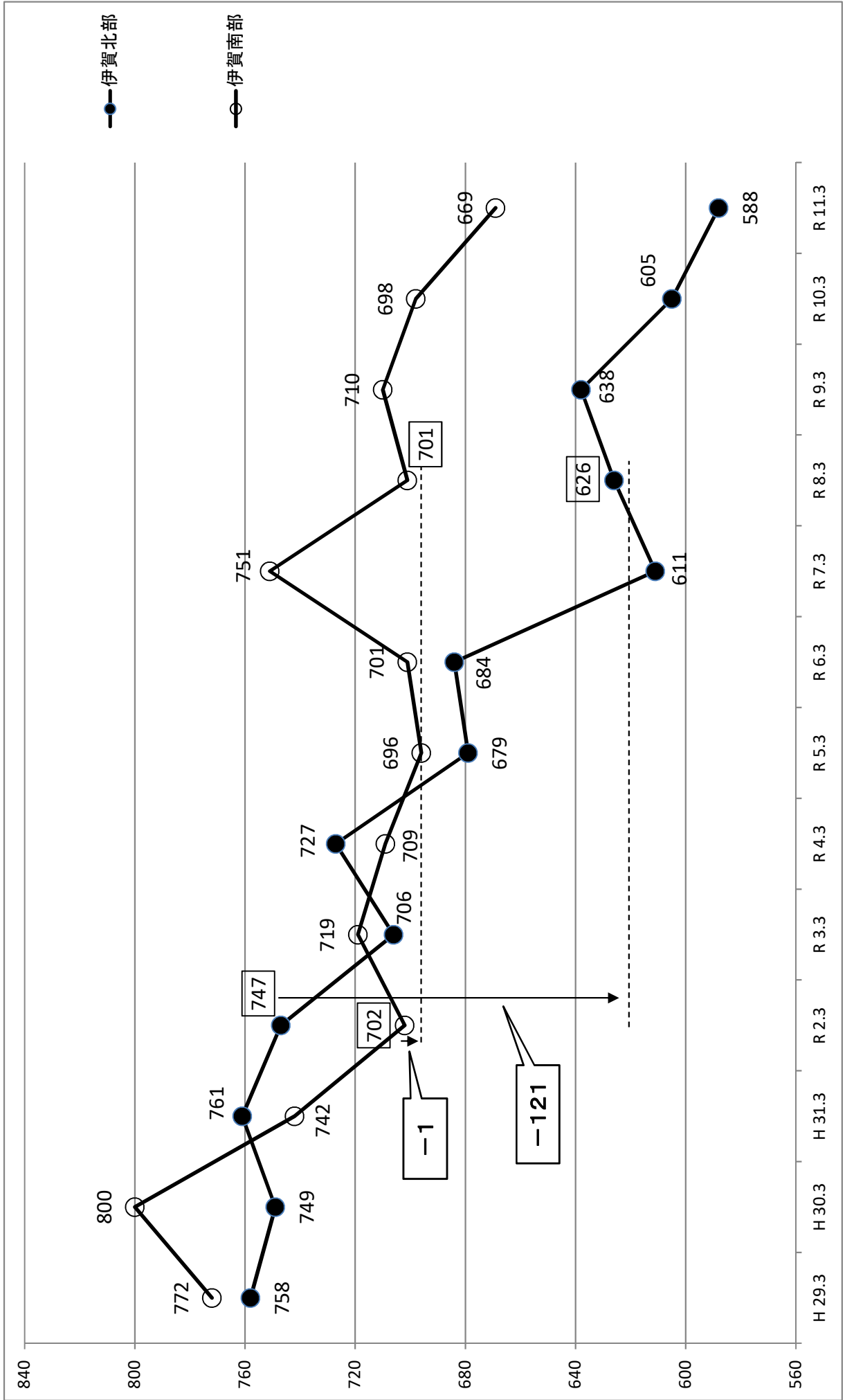
※ 伊賀南部＝名張市に旧青山町を加える。

(参考)

伊賀地域県立高校の1学年学級数	29	29	28	27	27								
() 内は入学定員の計	(1,160)	(1,160)	(1,120)	(1,080)	(1,040)								
伊賀北部＝伊賀市から旧青山町を除く。													
伊賀南部＝名張市に旧青山町を加える。													
県内合計													
卒業生数	17,513	17,458	16,811	16,489	15,781	16,211	16,020	15,890	15,582	15,434	15,254	14,729	14,363
前年度対比		-55	-647	-322	-708	430	-191	-130	-308	-148	-180	-525	-366
R2.3対比					-708	-278	-469	-599	-907	-1,055	-1,235	-1,760	-2,126
小中学校在籍者数					15,774	16,172	16,006	16,024	15,720	15,569	15,409	14,878	14,479

伊賀地域の中学校卒業生数の推移と予測(含社会増減)【北部・南部別】 グラフ

資料6③



これまでの協議をふまえた論点整理

1 子どもたちに育みたい力をつけるための教育について

【中央教育審議会の意見より】

- 急激に変化する時代の中で、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。
- 中央教育審議会では、社会の変化にいかに対処していくかという受け身の観点に立つのであれば難しい時代になる可能性を指摘したうえで、変化を前向きに受け止め、社会や人生、生活を、人間ならではの感性を働かせてより豊かなものにする必要性等を指摘した。次代を切り拓く子供たちに求められる資質・能力としては、文章の意味を正確に理解する読解力、教科等固有の見方・考え方を働かせて自分の頭で考えて表現する力、対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し新しい解や納得解を生み出す力などが挙げられた。
- 豊かな情操や規範意識、自他の生命の尊重、自己肯定感・自己有用感、他者への思いやり、対面でのコミュニケーションを通じて人間関係を築く力、困難を乗り越え、ものごとを成し遂げる力、公共の精神の育成等を図るとともに、子供の頃から各教育段階に応じて体力の向上、健康の確保を図ることなどは、どのような時代であっても変わらず重要である。

【協議会で出された主な意見】

- 社会は、自分で考え自分で行動する力や、他者に思いを伝え周囲を巻き込み自分の考えを実現する力を求めている。子どもたちには、もっと積極的に地域に出ることで、失敗を恐れずチャレンジする経験をしてほしい。(H30・第2回)
- 変化し続ける社会に対応し自分で考え行動する人材が求められている。(R2・第1回)
- 外国の子どもたちと比較すると、プレゼンテーション能力やPRする力の向上が必要であると感じる。(R2・第1回)
- 「自立する力」と「共生する力」が大切であると感じており、課題を解決する力や情報を活用する力、コミュニケーション力を育む教育を進めたい。(R2・第1回)
- 社会の変化や身近な課題を自分事として捉えることが重要だ。学校での学習にとどまらず、地域社会にも関心を持ってもらいたい。(R2・第1回)

検討が必要な項目

一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるような教育の実現のために、必要な方策について検討することとしてはどうか。

検討を進めるにあたっては、以下の2点を考慮することを前提としてはどうか。

- ① 急速に変化する社会における、学校教育における「不易」たるものと、時代の変化という「流行」のバランス
- ② 各高等学校が地域社会と接点を持ちつつ、多様な人々とつながりを保ちながら学ぶことのできる、社会に開かれた教育環境づくり

2 地域における県立高等学校のあり方について

【中央教育審議会の意見より】

- 高等学校教育が実現を目指す学びの姿
「多様な生徒の興味・関心や特性、背景を踏まえて、特色・魅力ある教育活動が行われるとともに、特別な支援が必要な生徒に対する個別支援が充実しており、また、地方公共団体、企業、高等教育機関、国際機関、NPO 等と連携・協働することによって地域・社会の抱える課題の解決に向けた学びが学校内外で行われ、生徒が自立した学習者として自己の将来のイメージを持ち、高い学習意欲を持って学びに向かっている。」
- 普通教育を主とする学科として、普通科に加えて、例えば、
 - ・SDGs の実現や Society5.0 における現代的な諸課題への対応を図るために学際科学的な学びに重点的に取り組む学科
 - ・地域や社会の将来を担う人材の育成を図るために、地域社会が抱える課題の解決に向けた学びに重点的に取り組む学科
 - ・その他普通教育として求められる教育内容であって特色・魅力ある教育を実現すると認められる学科を各設置者の判断により設置できるようにすることが求められる
- 職業教育を主とする学科を置く高等学校（以下「専門高校」という。）においては、社会の急激な変化に伴い、修得が期待される資質・能力も変わってきており、地域の持続的な成長を支える最先端の職業人育成を担っていくには、加速度的な変化の最前線にある地域の産業界で直接的に学ぶことができるよう、産業界と高等学校と一体となった、社会に開かれた教育課程の推進が重要である。
- 多くの開設科目から主体的な選択履修が可能であるという特徴を有する総合学科においては、自分とは異なる興味・関心を持つ生徒と共に多様な科目を履修することで、自らの進路を見つめ直しつつ、多様な分野に関する知識及び技能や異分野と協働する姿勢といった、これからの時代に求められる資質・能力を育成することが期待されている。
- 新しい時代を生きる子供たちに必要となる資質・能力をより一層確実に育むため、子供たちの基礎学力を保障してその才能を十分に伸ばし、また社会性等を育むことができるよう、学校教育の質を高めることが重要である。その際、様々な背景により多様な子供たちが、実態として学校教育の外に置かれることのないようにするべきである。
- 勤労青年のための教育機会を保障するために制度化された定時制・通信制課程は、現在では、不登校経験者、中途退学経験者、特別な支援を要する生徒、帰国生徒・外国人生徒等、多様な学習歴や動機を持ち、困難を抱える生徒の受け皿としての役割を果たしており、こうした多様な学習ニーズに応じ、特色のある教育活動をこれまで以上に実施することを考えた場合、現在の教育環境は十分なものとなっているか考える必要があるのではないか。

【協議会で出された主な意見】

- 一人の保護者としての個人的な意見としては、子どもたちが伊賀市と名張市を行き来

- することはあまりないように思うので、現在の5校を維持して欲しい。(H29・第1回)
- あけぼの学園高校は例外として、これまで4学級規模以下の学校は統合してきている。今後、子どもの教育を大切に考えると、5学級規模を下回ることはできない。(H29・第1回)
 - 1学年4学級以下の学校規模では活性化が難しいという議論が以前にもあったが、そこに向かうような施策でよいのか。(R1)
 - 平成18年9月の協議会のまとめにおいて、平成27年度から平成33(令和3)年度の頃には、地域の県立高校は4校に統合されているイメージが出されていることをふまえ、今後4校に再編していく方向を具体的に議論すべきである。(R1)
 - 少なくとも、北部においては、現在の学科・コースを維持することが望ましい。伊賀地域の県立高校数も現在の5校を保つべきである。(R1)
 - 学校にうまく馴染めない子どもたちが社会へ出て力を発揮できるよう、持っている力を伸ばし育てることが大切である。そのためにも昼間定時制の設置を検討してみてはどうか。(R2・第1回)
 - 通学事情をふまえると現状の伊賀地域の県立高校の配置は適切であるといえる。今後の配置を検討する際も、通学の負担を考慮して考えてほしい。(R2・第1回)
 - 外国にルーツのある子どもたちや特別な支援を必要とする子どもたちの学習支援については、伊賀地域全体で各校が担う役割を考えることが必要である。(R1)
 - ほぼ高校全入の時代にあって、特別な支援を必要とする子どもたちや外国にルーツのある子どもたちの中には、高校に進学するために地域外の学校を選択せざるえない状況がある。地域の高校に進学したい地域の子どもたちにとって望ましい学校の選択肢を用意し、カリキュラムを工夫することが大切である。(R2・第1回)

検討が必要な項目

生徒数が減少する中における伊賀地域の県立高等学校のあり方について、以下の2つの視点から、検討することとしてはどうか。

- ① 高等学校における学科(普通科、専門学科、総合学科)の特色や、課程の区分(全日制、定時制、通信制)をふまえながら、子どもたち一人ひとりの学習ニーズに応じた教育内容の充実に向けて取り組めることは何か。
- ② 子どもたちの学習環境をよりよいものとするため、どのような県立高等学校の規模と配置が望ましいか。

3 活性化に向けた方策について

【中央教育審議会の意見より】

- 特色・魅力ある教育活動を展開するための方策として、地域社会や高等教育機関、企業等の関係機関と連携・協働することが求められる。もとより、子供たちの資質・能力は学校だけで育まれるものではないことから、一つの学校で全てを完結させるという「自前主義」から脱却し、学校内外の教育資源を最大限活用して、関係機関にも開かれた教育活動が行われる必要がある。
- ICTの活用や関係機関との連携を含め、現に学校教育に馴染めないでいる子供に対して実質的に学びの機会を保障していくとともに、離島、中山間地域等の地理的条件に関わらず、教育の質と機会均等を確保することが重要である。

【協議会で出された主な意見】

- あけぼの学園高校の生徒による中学校への出前授業など、高校生の生き生きとした姿が中学生の進路決定に結びついている。中学生にとって多様な選択肢が維持されるよう、今後もこれらの取組を続けてほしい。(H29・第2回)
- 名張青峰高校のICT機器を活用したアメリカの高校生との交流等は、グローバル化に対応したすばらしい取組となっている。国際交流活動を活発にするために海外留学の資金援助等が必要である。(H30・第2回)
- 学校と地域が連携した学習活動を促進するためには、学校と地域をつなぐコーディネーターが必要である。町づくりに関わる地域の人材がその役割を担うことができたらと思う。(H30・第2回)
- 県立高校が地域からさらに支持されるためには、中高の連携による取組の成果などについての情報発信を強化する必要がある。(H29・第2回)
- 在学する高校生が、自分の高校の魅力を伝えれば、中学生もより興味を持って聴くことができ、学校の魅力や楽しさが伝わると思う。(H30・第2回)

検討が必要な項目

伊賀地域の県立高等学校の特色化と魅力化を進めるにあたって、以下の2つの視点から、検討することとしてはどうか。

- ① 社会が大きく変化し、生徒の興味・関心、能力、適性等の多様化が進む中で、様々な教育活動における生徒の実態や学習ニーズに応じた指導をどのように進めるのか。
- ② 県立高等学校に対する地域の小中学生やその保護者の関心のさらなる向上に向けて、地域と産業界はどのような役割を果たし、何に取り組むことができるか。